

私のことを無常なこの世を捨てる人と言いますが、あなたは分かっているでしょう、この私が世間の人から気遣いじみていると言われる身であることを。

【語釈】○常ナラス世ヲ捨ツルトハ ⑭諸行ヲバ無常ナリトテ身ヲ捨ル人」を受けた表現。末尾の「捨ツルトハ」は、底本と高山寺秀智本以外は「捨ル共(トモ)」。『歌集』もそうであり、意味から考えても本来は「スツルトモ」が妥当。○見ル 見て知っている、理解する。○物クルハシト人ハイフ身 人から気狂いじみていると言われる明恵自身のこと。「物クルハシ」は「もの狂ほし」に同じ。

【参考】◆『歌集』77、二三句「ヨラスツルトモキミツシル」

【考察】⑭への返歌。明恵を「無常なりとて身を捨つる人」と詠んで懂れる仏性に、明恵はその意志を確かめるかのように自分への世評を示した。

⑯ 跡ヲクラフシテ入ニシ山ノ奥ナレド君ニハ見セヨ峯ノ白雲

『伝記』巻上・四十六丁表(岩波150頁)

【校異】※当該歌なし(慶貞・高慶四・高秀)○クラフシテ□<sub>テ</sub>(興a)クラシ

テ(興b・穂・東永)カラシテ(慶文)クラクシテ(物)○見セヨ<sub>見</sub>ヨ(興a)

【通釈】

足跡をくらまして入った山の奥であるけれど、あなたには私の足跡を見せてやりなさい、峰の白雲よ。

【語釈】○クラフシテ 見えないようにする意。『歌集』は「クラシ」、興福寺b本・東大寺永正本・穂久邇本・慶應文明本は「クラシテ」、上人物語本は「クラクシテ」で本文が乱れている。底本の初句「跡ヲクラフシテ」は大きく字余り。

【参考】◆『歌集』78、初句「アトヲクラシ」、三句「ミネナレド」【考察】白雲や霧に導かれて明恵の求法の跡を尋ねようと詠む仏性に対して、峰の白雲に呼びかける形で共感を示した。『歌集』では76「シラ雲トミネノカスミニムスポレテノリヲモトルアトラタツネム」への返歌、『伝記』では対応する贈歌がない。

〈付記〉貴重な資料の閲覧・複写をお許しくださった慶應義塾図書館、興福寺、東大寺図書館の関係者の皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。なお、本研究は平成19年度科学研究費補助金(若手研究B)による成果の一部である。

\*Notes of Waka in "Myoe Synon Denki" (2)

\*\*Tae Hirano (Japanese Language and Literature)

キーワード 明恵・伝記・和歌

を生じさせることに喩えることによつた表現で、明恵は五秘密の本尊である欲・触・愛・慢の四金剛菩薩を四摂菩薩に比定している（『五秘密』『華嚴仏光三昧觀秘寶藏』巻下など）。○弱吽鏝斛 jai (鉤召) hum (索引) ban (鏝縛) hou (歛喜) の音写。四摂菩薩の真言種子。五秘密の真言の一部でもある。明恵は「弱吽鏝斛」を「釣召・引入縛<sub>テ</sub>歛喜セシムル也。上<sub>ニ</sub>向<sub>テ</sub>ハ諸仏功德<sub>ヲ</sub>釣召<sub>シ</sub>下<sub>シテ</sub>一切衆生<sub>ニ</sub>サツケ、下<sub>ニ</sub>向<sub>テ</sub>ハ一切衆生<sub>ヲ</sub>哀<sub>ミテ</sub>ツリヨセテ佛法<sub>ニ</sub>入<sub>レシムル</sub>也」（『五秘密』826頁上）と説明する。

【参考】◆『歌集』91、詞書「如来大慈悲ニヨリテ教法ニアヒテ、ヤウヤクニオコナヒツトムルニ、仏果モトラカラネバ」、第三句「ウカブナリ」

【考察】魚を釣り上げるかのように衆生を佛法に導く菩薩の行為を詠みながら、ジャク・ウン・バン・コクを舟を漕ぐ音になぞらえた。一首の世界は、馬飼いが馬を歩かせるときの掛け声「あしあし」を「阿字阿字」と聞きとつて感涙にむせんだという徒然草144段に通じている。

又或時、仏性聖人、楞伽山ノ草庵ニ来臨シテヨメル

⑭ 諸行ヲバ無常ナリトテ身ヲ捨ル人ノ心ニナルヨシモガナ

『伝記』巻上・四十六丁表（岩波150頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞）○又一なし（高慶四・高秀）○或時なし（興b・高秀・物・穂・東水・慶文）○仏性なし（高秀）○聖人―上人（高慶四・興a・興b・物・穂・東水なし）（高秀）○楞伽山ノ草庵―なし（高慶四）○捨ル―捨ル（慶文）

【通釈】

またある時、仏性聖人が楞伽山の草庵をお訪ねになつて詠んだ歌

この世のすべての現象は無常だといつて遁世した上人の御心になる方法があればいいなあ。

【語釈】○或時『歌集』75の詞書から建保四年（一一二一）四月九日の詠と知られる。○仏性聖人『鳳笙師伝相承』に「利秋一男。南都笙正統。菩提山僧也」とある豊原利秋の子・仏性か（小澤サト子）。仏性の名は『牀源抄』中の「鳳笙相伝」や「大家笛血脈」（統群書類従19上）にも見える。菩提山は奈良の菩提山正暦寺か。正暦寺は建保六年（一一二一）興福寺別当であった信円（藤原忠通の子）が再建・復興し、以後興福寺の別院となった。○楞伽山 高山寺石水院の北側にある山のこと、楞伽経にちなんで名付けられた。↓④【語釈】○来臨 他者の来訪を意味する敬語。○諸行 この世のすべての現象。○人 明恵を指す。○よし

もがな「よし」は方法。「もがな」は他に対する願望。

【参考】◆『歌集』75、詞書「建保四年四月九日、仏性上人楞伽山ノ草庵ニ来臨。以四首和歌来。中二首詠愚僧籠居事」

【考察】この世の無常を悟り、遁世して修行に専念する明恵の境地への憧れを詠んだ仏性上人の一首。

上人御返歌

⑮ 常ナラヌ世ヲ捨ツルトハ君ゾ見ル物クルハシト人ハイフ身ヲ

『伝記』巻上・四十六丁表（岩波150頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞）○上人御返歌―返哥（高慶四）上人返事（興a・物）返（興b）返事（穂・東水）返シ（慶文）○捨ツルトハ―捨ル共（高慶四・興a・興b・物・穂・東水・慶文）○物クルハシト―物クルワシキ（高慶四）

【通釈】

上人の御返歌

あった国。○五六十里 二五〇〜三〇〇<sup>ト</sup>。時代によって異なるが、一里を五〜六町として試算すると一里は約五〇〇<sup>ト</sup>。○師子国 今のスリランカ。○羅婆那城 師子国にあった羅婆那夜叉王の城。○楞伽山 ↓④【語釈】。○四五尺 約二二〇〜一五〇<sup>ト</sup>。時代によって多少異なるが一尺は約三〇<sup>ト</sup>。○二丈 約六<sup>ト</sup>。一丈は一尺の十倍。○金剛智三蔵(六七一―七四一) 中インド出身の僧で、真言宗の付法第五祖とされる。不空の師。インドのナランダ寺院で出家し、三十一歳のとき南インドで龍智菩薩から金剛頂經系統の密教を授けられた後、『金剛頂略出念誦經』四巻などを漢訳し、中国に密教を広めた。○文影 紋様。ここでは釈迦如来の足の千輻輪相をいう。○輪相 「千輻輪相」に同じ。↓⑨【語釈】。○定心石 ↓⑪【語釈】。○遺跡窟 『高山寺縁起』(652頁)に、繩床樹・定心石より少し奥に坐禅に適した石窟があり、そこに仏足石を模して作って遺跡窟と名付けたこと、そこで坐禅入観につとめたことが書かれる。↓⑪【考察】。○満月ノ面 釈尊の顔を満月に見立てた表現。○巖 高くそびえた岩。ここでは、定心石の奥にある、仏の足跡を彫りつけた大盤石を指す。○足ヲコンスレ 足を地面等に摺りつける「足摺」は、強く嘆き悲しむときの身体表現。

【参考】◆『貞元新定釈教目録』巻第十四・金剛智伝「次行至嚕呵那国国管宝山。…(中略)…時逢龜嶺皆是先靈修道之所。山中香花草木不可称計。不停不滞七日攀縁方至山頂。尋求靈跡見一円石。可高四五尺許方広可有二丈。仏之右足隱在石上見有損缺。心即生疑謂之非是仏跡。仰天号泣憶昔如来。遂感五色雲現及有円光仏跡相輪分明顯現。聞有声音。此真仏跡。但為往代衆生將來業重留此跡耳。聞已歡喜香花供養。…(中略)…其山下五六十里外周有山

圍繞。状如城壁。山上総是白雲。国人号名楞伽城山。山外西北連師子国界。余是大海」(大正蔵五五卷875〜876頁)

【考察】詞書に載る金剛智の逸話は、唐の円照による『貞元新定釈教目録』の「金剛智伝」に沿った内容。この『貞元真定釈教目録』は、鎌倉初期の高山寺経蔵の実態を示す高山寺蔵『唐本一切経目録』(『明恵上人資料 第四』所収)にも書名が見え、明恵が『貞元真定釈教目録』の「金剛智伝」を目にした可能性は高い。なお、時代は下るが栄海編『真言伝』(一三二五成立)の「金剛智伝」にも同様の話が見える。

上人或時読給ケル

⑬ 生死海ニ慈悲ノ釣舟出ニケリ漕行ヲトハ弱畔鏝斛

『伝記』巻上・四十六丁表(岩波150頁)

【校異】※当該歌なし(慶貞・高慶四) ○上人或時読給ケルなし(興a・興b・

物・穂・東永・慶文) 仏性上人(高秀) ○弱畔鏝斛―弱畔鏝斛(興a) 弱畔鏝斛

(高秀) 弱畔鏝斛(物・穂)

【通釈】

明恵上人があるときお詠みになった歌

果てしない生死の海に、衆生をいつくしみ哀れんで救ってくれる釣舟が浮かんでいる。その舟に乗る菩薩は、鉤と網と鎖で魚を釣り上げて捕らえるかのように衆生を仏法に導いて歓喜させ、漕ぎゆくその音は弱畔鏝斛と聞こえてくるなあ。

【語釈】○生死海 生死を繰り返す果てしない世界を海に喩えた表現。○慈悲ノ釣舟 菩薩の慈悲による救済行為を釣りにつづけた。四摂菩薩(密教で、金剛界曼陀羅中の鉤・索・鏝・鈴の四菩薩)が衆生を仏法に導く行為を、鉤・索・鏝で魚を釣り、歓喜の思い

遺跡ヲ尋見給フニ、文影損欠セリ。仏跡ニ非ザルカト疑フ。于時五色ノ雲霧<sup>タナレキ</sup>テ、其中ニ円光アテ仏跡ヲ照ス。其時ハ輪相分明ニ顯<sup>レ</sup>現ス。空中ニ有<sup>テ</sup>テ声告テ云、是誠ノ仏跡也。如來将来ノ衆生ノ爲ニ此跡ヲ留<sup>シ</sup>置キ給ヘリト云々。三藏、其声ヲ聞<sup>キ</sup>テ歡喜<sup>シ</sup>泪セキアヘズ。此事思出サレテ浦山敷ケレバ、此定心石ノ奥ニ大盤石アリ。其石ノ上ニ仏ノ御足<sup>ヲ</sup>跡ヲ彫<sup>リ</sup>付<sup>テ</sup>供養ヲナシ給。仍遺跡窟<sup>ト</sup>名ク

⑫ 満月ノ面ヲ見ザル悲サニ巖ノ上ニ足ヲコソスレ

『伝記』卷上・四十五丁表〜四十六丁表(岩波149・150頁)

【校異】※当該歌なし(慶貞・高慶四)○魯崎那国―噌崎那国(興a) 噌崎那国

(興b・高秀・物・穂・東水・慶文)○キビシキキビシクシテ(物)○西北ノ西国(興a)○連ナリ烈<sup>テ</sup>(興a)連テ(興b)連<sup>リ</sup>(物)ツラナリテ(穂・東水・慶文)○其外ハ皆―其外ニ(慶文)○国ノ人―なし(高秀)○是ヲ―なし(高秀)○

山ノ頂―昔金剛智三藏爰至<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>山ノ頂ニ(興a)昔金剛智三藏此山ノ頂ニ(興b)物・穂・東水・慶文)○如來御足―如來右御足(興a)如來右ノ足跡(興b)物)○金剛智三藏―三藏(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○其遺跡ヲ尋見給フニ―是見<sup>ル</sup>

(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○文影損欠セリ―仏跡無<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>損減<sup>ス</sup>然<sup>レ</sup>三藏是<sup>レ</sup>悲<sup>シ</sup>高秀)文影損欠セリ(興b)文影損欠<sup>ク</sup>(物)○仏跡―誠ノ仏跡ニ(興a)なし(高秀)其跡ニ(東水)○非ザルカト疑フ―なし(高秀)○于時―爰(興a・穂・東水・慶文)○其中―其上ニ(物)○仏跡ヲ照<sup>ス</sup>。其時―なし

(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○空中―なし(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○給ヘリト云々―給(興a)給ヘリ(興b)穂・東水・慶文)○其声―此声

(興a・物・穂・東水・慶文)此音(興b)○歡喜<sup>シ</sup>泪セキアヘズ―身氣立<sup>テ</sup>歡喜<sup>シ</sup>思<sup>フ</sup>發<sup>ス</sup>發露涕泣<sup>ス</sup>(興a)歡喜<sup>シ</sup>ノ思<sup>フ</sup>發露涕泣<sup>ス</sup>(興b)物・穂・東水・慶文)○思出サレテ―なし(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○此定心石―定心石(高秀)○奥ニ

なし(東水)○大盤石アリ―大盤石有其辺ニ坐<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>興a・興b)物・穂・東水・慶文)盤石アリ(高秀)○其石―此石(興a・興b)穂・東水・慶文)○彫<sup>リ</sup>付<sup>テ</sup>―

彫付玉テ(高秀)○供養ヲ―供養<sup>ス</sup>(物)○ナシ給―成(興a)作<sup>ス</sup>(興b)なし(物)ナス(穂・東水・慶文)○仍―仍<sup>テ</sup>号<sup>シ</sup>(興a・興b)物・穂・東水・慶文)○名ク―名爰<sup>テ</sup>説給ケリ(興a)○巖ノ上―岩ヲカ上(慶文)

### 【通釈】

また天竺の魯崎那国に大きな山があった。山頂から五、六十里ほど下った外側を山が取り囲んでおり、険しい形の垣のように見える。過去の高僧たちが修行した神聖な遺跡が多く、かくわしい花や素晴らしい草が満ちあふれている。西北は師子国につながっており、その外はすべて大海に囲まれている。魯崎那国の人は、師子国の羅婆那城になぞらえて、この山を楞伽山と名付けた。山の頂上には三つの丸い石があり、その高さは四五尺で、広さが二丈ほどあった。釈迦如來の御足の跡がその上にあつた。金剛智三藏が、その遺跡を尋ねて御覽になつたところ、仏足の紋様が破損しており、仏跡でないのかと疑つた。そのとき、五色の雲がたなびき、そのなかに丸い光があつてその仏跡を照らし、そのときに千輻輪相がはつきりと現れた。空中に声がして「これは眞の仏跡である。如來が将来の衆生のためにこの跡を留めおかれたのだ」と告げたのであつた。三藏は、この声を聞いて、歡喜の涙をこらえきれなかつた。この故事が思い出されてうらやましかつたので、この定心石の奥に大盤石があつたが、その石の上に仏の御足の跡を彫りつけて供養をして、遺跡窟と名付けた。

満月のような仏のお顔を拝見できないのが悲しくて、岩の上に足をすりつけて嘆くことだ。

【語釈】○魯崎那国 唐代に円照が撰述した一切経目録「貞元新定釈教目録」の金剛智伝には「噌呵那国」とある。師子国の近くに

同じ年の正月十二日の夜明けに、この樹の下で坐禅をした。風がはげしく吹き、雪や霰がひどく降って、衣の袖に霰がたまっていたので、修行を終えたときに、

松の下にある岩の上で坐禅をして過ごしていると、墨染めの衣の袖に霰が降りかかった。これはまさに「衣裏繫珠」そのもので、衣に白い宝珠が繫げられたようではないか。

この歌は、どのようにして天皇のお耳に入ったのであろうか、天皇が感動されて、続後撰集に入れられた。

【語釈】○華宮殿 ↓④【語釈】。○定心石 坐禅して心を統一するための石であることからの名。『古今著聞集』巻二・六四では、唐の善導の修行地として名高い悟真寺の石に模したと書かれる。○繩床樹 「繩床」は僧侶が坐禅の際に用いる腰掛けで、座面や背に縄を張ったもの。根本が二股になっており、坐禅に適した樹であることからの名。○同年 「伝記」では、これ以前に元仁元年の記事が見え、元仁元年の記事と推定される。『行状』には「元仁元年甲冬楞伽山の峯ニ蟄居ス、其間ノ記録別ニアリ、余事トドメテ偏ニ坐禅入観ヲ勤トス」(57頁)とあり、元仁元年の冬が坐禅に集中した時期と知られる。○出定 ↓⑤【語釈】。○墨染 黒色の僧衣。

「墨」に、松の下・巖の上に「住み」を掛ける。○カケシ白玉 僧衣の袖に降りかかった霰を「衣裏繫珠」の喩えて説かれる宝珠に見立てた表現。『法華経』五百弟子品に説かれる「衣裏繫珠」は法華七喩の一つで、古来多く和歌に詠まれた題材。貧しい男が、裕福な親友が衣の裏に縫い付けておいてくれた宝珠に気付かないまま放浪の旅に出て、後に親友に指摘されて宝珠の存在に気付くという話で、宝珠は仏の智慧の喩え。○天聴 天皇が聴くこと。

○御感 天皇などの貴顕が感動すること。○続後撰集 『新勅撰

集』の誤り。『続後撰集』にこの歌は見えない。

【参考】◆『新勅撰集』629、詞書「住房の西のたにいはほあり、定心石となづく、松あり、繩床樹となづく、もとふたえだにして坐するにたよりあり、正月ゆきふる日、すこしひまあるほど坐禅するに、松のあらしはげしくふきて、すみぞめのそでにあられのふりつもりて侍りけるを、つつみていしのうへをたつとて、衣裏明珠のたとひをおもひいでてよみ侍りける」、初二句「まつりたいはねのこけに」◆『古今著聞集』巻二・六四、初二句「岩のうへ松の木陰に」、五句「かけしその玉」

【考察】【語釈】「同年」であげた『行状』元仁元年冬の記事の末尾には「繩床樹定心石等ノ遺跡ノ別記ニアリ」(58頁)とあり、『高山寺縁起』には「又花宮殿西ニズシテ遠カ有リ一株ノ松、依テ宴坐ニ有ルニ便ニ名ヲ繩床樹、樹下ニ有リ磐石、名定心石、ト此樹床常坐禅入観、又從此至奥、不経幾程、有一石窟、又宜宴坐、於此処為模、如来双足輪之跡、号遺跡窟、常遊止シテ此窟、又坐禅入観、具有別記」(65頁)とある。これらから楞伽山にしつらえた遺跡とそこでの修行の記録が別にあつたと知られ、それが明恵の散佚した歌文集『楞伽山伝』に当たると推定されている(吉原シケコ他)。明恵が繩床樹で坐禅する姿は、「明恵上人樹上坐禅像」(高山寺藏・成忍筆・国宝)で名高い。

又天竺魯崎那国ニ大山アリ。山頂ヨリ下ル事、五六十里、外ニ巡テ山アリ。形キビシキ墻、如シ。先聖修道ノ靈跡多ク、香華名草充滿セリ。西北、師子国ニ連ナリ、其外ニ皆大海ナリ。国ノ人、羅婆那城ニ准ヘテ、是ヲ楞伽山ト名ク。山頂ニ三ノ円石アリ。高サ四五尺、広サ二丈計也。如来、御足ノ跡、其上ニアリ。金剛智三藏、其

## 【通釈】

入滅が近づいて、この石に自分で書き付けられた歌

私が死んだ後に愛おしむ人がいなければ、もとのところへ飛んで帰っておしまいなさい、高嶋の石よ。

## 【語釈】 ○此石

高嶋（鷹島）の石のこと。『伝記』では⑨に続いて

⑩が所収され、⑨の蘇婆石と鷹島の石が同一であるように書かれるが、この二つは別物。明恵の活動拠点であった梅尾の高山寺に二つの石が現存し、鷹島石には当該歌を書いた墨跡がわずかに残っている。吉原シケコ『明恵上人歌集の研究』に詳細な解説がある。○高嶋 鷹島と同じで、紀州の湯浅湾沖に浮かぶ小島。○カヘレネ 『歌集』の他、穂久邇本と東大寺永正本は「カヘリネ」。もともとは「帰る」の連用形に完了の助動詞「ぬ」の命令形「ね」が接続した「カヘリネ」であったか。帰ってしまいなさいの意。

## 【参考】 ◆『歌集』

145、詞書「紀州ノ浦ニタカシマト申スシマアリ。

カノシマノ石ヲトリテツネニフツクヘノホトリニオキ給シニカキツケラレシ」、初二句「ワレサリテノチニシノバム」、四句「トビテカヘリネ」◆『玉葉集』<sup>2595</sup>、詞書「紀伊國たかしまと申す所の石をとりて文づく糸のあたりにおきて侍りけるに、かきつけける」、初二句「われさりて後にしのばん」四句「とびてかへりね」

【考察】明恵は石、鳥、魚や貝、樹木など、人でないものにも慈愛の情を深く抱いた。『行状』には、明恵が鷹島のそばに浮かぶ苧磨島を恋慕して手紙を送ったり（36頁）、神護寺の中門の脇にある桜を恋しく思ったり（38頁）、海中の魚貝類に真言や陀羅尼を唱えて救済を祈ったり（120頁）したとある。

又華宮殿西ノ谷ニ一盤石アリ。定心石ト名ク。一株ノ松アリ。縄床樹ト名ク。其松ノ本、二重ニシテ坐スルニ便リアリ。常ニ其上ニシテ坐禅ス。

同年正月十二日ノ晝、此ノ樹下ニ坐禅。風烈シク、雪霰影 敷降テ、袖ニ霰ノタマリケレバ出定ノ時、

## ⑪ 松ガ下巖ノ上ニ墨染ノ袖ノ霰ヤカケシ白玉

此歌如何シテカ天聴ニ達シケン、御感アツテ則続後撰集ニ入ラレケリ。

『伝記』卷上・四十五丁表（岩波149頁）

## 【校異】

※当該歌なし（慶貞・高慶四）○又一なし（高秀）○本なし（興a）木

（慶文）○二重ノ両枝（興a）○其上ニシテ一其上ニ興a・興b・物・穂・東水・慶文 其松ノ下（高秀）○坐禅ス一坐禅ノ給ケリ（興a）○同年一元仁元年（興

a・高秀）元仁二年（興b・物・穂・東水・慶文）○晝一朝（興a）朝一（興b・

穂・東水・慶文）朝（物）○此樹下ニ坐禅一なし（物）○雪霰影 敷降テ、袖ニ霰ノタマリケレバ出定ノ時一雪気ナルニ其所ニ行テ坐ス及晝天一出定ニ身被テ埋雪ニ袖

電積ニ雪後又電レ成ケルモ不知（興a）雪深ニ其松ノ本ニ行テ坐ス及晝天一出定身モ

雪ニウツモレ袖ニ霰ツモレルニ雪後又アラレニナリケルモ被知（物）雪降ニ其処ニ行テ坐ス晝天一及出定身モ雪ニウツモレ袖ニモ霰ツモレルニ雪後又アラレニ成ケル

モシラレテ（興b・穂・東水・慶文）○巖ノ上ノ岩ホカ上（興b）イワホカ上（穂

岩ラカ上（東水・慶文）○此歌一此詠寄（興b・穂・東水・慶文）○如何シテカ一何トシテカ（興a・興b・物・穂・東水・慶文）イカ、シテ（高秀）○入ラレケ

リー入レケリ（興a）入ラレニケリ（興b・物・穂・東水・慶文）

## 【通釈】

また、華宮殿の西側の谷に一つの大きな堅い石があり、これを定心石と名付けた。一本の松があり、これを縄床樹と名付けた。その松の根元が二股になっていて坐るのに具合がよかったので、常々その上で坐禅をしていた。

石を拾った島については、苅磨島とも鷹島とも言われるが、実際にどの島で拾ったかは不明。○南無五天諸国処々遺跡 天竺にある釈迦の遺跡への帰依を表明した句。「五天」は五天竺のこと、古代のインドを東西南北と中央の五つに分けた総称。明恵が建保三年(一一二五)に書いた『遺跡講式』には「南無天人有情所帰依処大聖化儀処遺跡」(大正蔵八四卷902頁)とある。○同法 弟子。明恵は弟子を「同法」「同行」等と呼んだ。○千輻輪……踏留給ヘル石 仏足石のこと。「千輻輪」は仏の足の裏にある千の輻の車輪の紋様で、仏の三十二相の一。玄奘の『大唐西域記』などにも天竺内の仏足石に関する記事が散見する。『遺跡講式』では摩竭提国の仏足石を取り上げて、釈迦如来が入滅の前に石の上に立って足跡を残したことを記し、「其双足跡、長一尺八寸、広余六寸。両足俱有輪相、十指皆帶花文。魚形映起、光明時照」(大正蔵八四卷903頁)と足跡の形状が書かれる。○蘇婆河ト云河ノ辺 烏仗那国にある蘇婆伐窰堵河で、現在のスワート河。スワート河流域はガンダラ遺跡が多く残る。○蘇婆石 蘇婆河にちなんだ名。○冠者原 分別のない無頼の者たち。「原(ばら)」は人につく接尾語で、複数を示す。○薰力 身に蓄積された潜在的な力。『行状』と高山寺秀智本は「薰力」、それ以外の諸本は「薰加」。「薰加」の場合、薰習(習慣的)となつて身に付く影響が加えられる意となる。○慈悲ノ等流 「等流」は原因と同じ性質を持つ結果のこと。ここでは、その場にいたあらゆる人々が涙を流して歓喜したのが、如来の慈悲によるものだという事。

【参考】◆『漢文行状』巻中「又或時同法親族教輩相伴渡海中嶋、数日之間止宿遊覽、遙望西海、霞中二有嶋、擬彼嶋天竺三屢作禮拜唱云、南無五天諸国処々遺跡云々、長幼上下同作此禮、

上人告云、天竺者如来本生国也、彼国多有如来千輻輪ノ足跡、就中烏仗那国蘇婆卒堵河流、殊多如レ此靈跡、彼河水流入海ニ悉成一味ノ鹹水ト和合無隔、此磯辺ノ石染彼海水ニ、豈非遺跡形見ニ乎、又依急雨ニ入窟内ニ、省対瞿波羅龍窟、真影ノ前、凡所相伴、道俗上下百余人五六日間罷眠、調音作此禮拜、至無情凡卑之類、拭随喜涙、成感悦思、今想此因縁、皆是衆生悉有仏性、薰力、如来大悲方便ノ等流也、其時取一怪石、是誠心所感動之石也、仍擬蘇婆卒堵河、名蘇婆石ト持之、即詠一首云、遺跡洗留水毛入海力石思、牟都末之幾哉云々(120頁)

【考察】『高山寺縁起』の「楞伽山」の説明(651・652頁)には、当該歌詞書より詳細な蘇婆石についての記述が見える。それによると、明恵は蘇婆石を宝のように大切に片時も肌身から離さなかったが、晩年に禅河院へ移住するにあたり弟子の高信へ石を託したという。さらに高信は明恵の形見として大切にしていたが、上人の信者であった藤原盛兼が明恵を偲んで悲嘆にくれていたため、高信は盛兼にこの石を献呈し、盛兼は歓喜園山荘の上人御影所にこの石を安置して上人を追慕したとある。

⑩ 入滅近ク成テ、此石ニ自ラ書付給ケル  
我ナクテ後ニ愛スル人ナクハ飛テカヘレネ高嶋ノ石

『伝記』巻上・四十四丁裏(岩波148頁)

【校異】※当該歌なし(慶貞・高慶四) ○入滅御入滅(高秀) ○成テ成玉テ(高秀) ○自ラ自筆(物) ○給ケル給ケリ(興a) ○愛スルーアヒヌル(物) ○飛テ問テ(東水) ○カヘレネ返ネ(興a) カヘレナ(高秀) カヘリネ(穂・東水)

【校異】 ※当該歌なし（慶貞・高慶四）○華宮殿―又花宮殿（高秀）○ヲ置リーアリ（高秀）○是ハ―なし（興 a・興 b・物・穂・東水・慶文）○下向ノ時―下向スル事有テ同法并ニ親類ト共ニ（興 a・興 b）下向スル事アリキ同朋并親族共ニ（物・穂・東水・慶文）○逗留ス―留テ（興 a・興 b・物・穂・東水・慶文）○其時―遙（興 a・物・穂・東水・遙（興 b）○カスミテ―カタスミテ（穂）○天竺―五天竺（高秀）○准ヘテ―成テ（興 a・興 b・物・穂・東水・慶文）○礼拝ヲナス―礼拝成テ（興 b）礼拝致ス（高秀）○多クノ同法……告テ曰―なし（高秀）○男子―男女（興 b）○同礼拝―同此礼拝（興 b・物・穂・東水）○進テ―進ス（慶文）○天竺―天竺（物）○石アリ―アリ（興 b）石多アリ（高秀）○蘇婆河―烏仗那国蘇婆率堵河（慶文）○其河―此河（興 a・慶文）○同ジ塩ニ染リタル石―其染タル石（興 a）其塩ニ染テ石物・穂・東水 シホニ染リタル石（慶文）○ナレバトテ―ナレバ（興 b・物・穂・東水・慶文）○此磯ノ石ヲ取テ蘇婆石ト名ケ―なし（興 a・興 b・物・穂・東水・慶文）○形見ト思ヒ―形見ト覚テ（興 a・興 b・穂・東水・慶文）形見思テ（物）○七ケ日ノ間……理リニ覚―浪ノ音ニ洗ヒ一七日ヲ礼拝ス（高秀）○浪ノ音―浪ニ（穂）○イヒシヲヌ―シラヌ（物）○成サズト云事ナシ―無不ト成（興 a・物成ス興 b）○誠―誠ニ（物）○衆生―衆生ニ（物）○薰力―薰加（興 a・興 b・物・穂・東水・慶文）○此磯ノ石―其石（高秀）○持シテ身ヲ放テ給ハヌ―取蘇婆率堵河ノ石准テ蘇婆石ノ名ヲ在々処々ニ身離事無（興 a・東水・慶文）取テ蘇婆率堵河ノ石ナソラヘテ蘇婆石号ヲ在々処々ニ身放事ナシ（興 b・物・穂）持テ身ヲ放テ給ハヌ（高秀）○思ヒツツケ給フ―思ツツケラレケリ（興 a・興 b・穂・東水・慶文）連テ給フ（高秀）被思烈（物）

## 【通釈】

華宮殿の東側の欄干の上に一つの石を置いていた。これは、以前紀州に下向したとき、海に浮かぶ島に四五日の間滞在したことがあった。そのときに、西の沖に島が霞んで見えたのをインドになぞらえて、「南無五天諸国処々遺跡（五天竺の諸国にある遺跡に帰

依します）」と唱えて、泣く泣く礼拝した。多くの弟子や親類の男子等がおり、彼らに同じように礼拝するよう勧め、「インドには足裏に千輪輪相を持った釈迦如来の足跡が留められた石がある。とくに、北インドの蘇婆河という河のあたりには釈迦如来の御遺跡が多く残っている。その河の水もこの大海に注いでいるとすると、同じ海の塩水に染まった石であるから」と言つて、この磯の石を取つて蘇婆石と名付け、如来の御遺跡の形見と思ひ、七日の間、昼夜を通し、松風で眠気を覚まし、波の音に声調を合わせて礼拝をしたところ、とるにたりない従者たちまでがすべて涙を流して感激したのであった。誠に衆生にも仏となる力があり、このようなことも如来の慈悲そのものであるから、如来と縁のあるものに感動するのも当然だと思われる。この磯の石を持ち帰り、肌身からお放しにならなかつた。そこで、一首を思つて続けて詠まれた。

天竺にある如来の遺跡に注いだ雨水も蘇婆河を経由して海に流れ込み、紀州の海まで繋がっている。そう思うとこの海にひたされた石は、如来に縁のあるものとしてなつかしく思われるよ。

【語釈】○華宮殿 ↓④【語釈】。○高欄 建物の濡れ縁などに設けた手すり。『高山寺縁起』（651頁）に「花宮殿東高欄上ニ構テ台ニ安ヌ一ノ靈石ヲ、名蘇婆石ト」とあるように、蘇婆石は高欄に設けられた台に安置された。○先年 『漢文行状』巻中では「建久末比下向紀州……」に続く記事の後に、当該歌の逸話が「又或時……」と続く。明恵が建久末に紀州へ下向したのは建久九年（一一九八）二六歳のこと。○海中ノ嶋 『漢文行状』巻中（119頁）では湯浅の海の島として荊磨島（荊藻島）・鷹島・久礼島をあげている。蘇婆



○俱舎ノ頌 世親著『阿毘達磨俱舍論本頌』一卷。インドの部派仏教の一大部派であつた説一切有部の教義を偈頌にまとめたもの。この偈頌に世親が注釈を加えたのが『俱舍論』三十卷。いずれも玄奘によつて漢訳され、日本でも仏教の基礎学として重んじられた。○智断恩ノ三徳 「智徳」「断徳」「恩徳」の三つの徳。↓【語釈】「三徳」。○諸一切種諸冥滅 【語釈】「如理ノ正法」であげた『俱舍論』の偈の冒頭部分。○高クカケツクリタル谷ヨリ 高く懸けて造つた花宮殿の下の谷から、の意。『高山寺縁起』には花宮殿について「前向テ深谷ニ懸テ造リ」とあり、花宮殿が楞伽山の斜面から谷にさしかけて造る懸造であつたと知られる。○峯ノ嵐 峰から吹き下ろす激しい風。○諸一切種 詞書の「次デニ諸一切種諸冥滅ト上タレバ」を受けた表現。前掲『俱舍論』の偈頌冒頭。○為兼卿 京極為兼（一一二五四—一三三三）。『玉葉和歌集』の撰者。感覚を重視した新鮮な歌風で鎌倉歌壇に刺激を与え、京極派の祖とされる。為兼の歌論『為兼卿和歌抄』には、「たゞ明恵上人の遣心和哥集序にかゝれたるやうに『すくは心のすくなり。いまだ必ずしも詞によらじ。やさしきは心やさしき也。なんぞさだめて姿にしもあらむ』とて、心に思事はそのまゝによまれたれば、世のつねのおもしろさもあり」と、散佚した明恵の『遣心和歌集』序が引用され、為兼が明恵詠を評価していたことがうかがわれる。ただし、為兼が当該歌「峯ノ嵐ニ」を評価した事実には知られない。「後日ニ人語云為兼卿…」以下の部分は、諸本によつて異同があり、穂久邇本や東大寺永正本のように「私注云…」を冒頭に持つ伝本もあることから、後代の増補と見られる。○ヨリスヂリタル物 身をよじるように苦悩して詠んだ歌。

【参考】↓⑦【参考】。

【考察】当該歌は、『伝記』諸本のうち古態を残す慶応貞治本・高山寺慶長四年本・高山寺秀智本に収められないことから、後に増補されたものと考えられる。歌の後に書かれる「後日ニ人語云」ではじまる為兼による明恵詠の讚嘆記事は、興福寺a本は版本に比べて簡略な記述であり、穂久邇本・東大寺永正本は「後日」の前に「私注云」とある。興福寺b本では、為兼の讚嘆記事が「或日、華宮殿ノ縁ノ畔リニ」の前に書かれるなど、諸本によつて相違があり、この部分も後代補われていったと推測される。また、当該歌の詞書冒頭「或日、華宮殿ノ縁ノ畔リニ経行スルニ……」は、『歌集』122の詞書「楞伽山ノ禪堂ニイリテ出観ノノチ、闇々タルクラキヤミニ縁ノ辺ニ経行アリテ……」と似た状況だが、和歌は異なる。

華宮殿ノ東ノ高欄ノ上ニ一ノ石ヲ置リ、是ハ先年紀州ニ下向ノ時、海中、鳴ニ四五日逗留。其時西ノ沖ニ鳴ノカスミテ見ヘタルヲ天竺ニ思ヒ准ヘテ、南無五天諸国処々遺跡ヲ唱テ、泣々礼拝ヲナス。多クノ同法亦親族ノ男子等アリ。同礼拝ヲ進テ告テ曰、天竺ニ如来ノ千輻輪ノ御足ヲ踏留メ給ヘル石アリ。殊ニ北天竺ニ蘇婆河ト云河ノ辺ニ如来ノ遺跡多クアリ。其河ノ水モ此ノ海ニ入レバ同シ塩ニ染リタル石ナレバトテ、此儀ノ石ヲ取テ蘇婆石ト名ケ御遺跡ノ形見ト思ヒ七ケ日間、夜昼松ノ嵐ニ眠ヲ覚シ、浪音ニ声ヲ調テ礼拝ヲナスニ、イヒシヲ冠者原マデモ涙ヲ拭テ歎喜ノ思ヲ成サズト云事ナシ。誠ニ衆生ノ仏性ノ薰力アレバ、是マデモ如来ノ慈悲ノ等流ナレバ、因縁感動モ理リニ覚ユ。此儀ノ石ヲ持シテ身ヲ放チ給ハヌ。仍一首思ヒツツケ給フ

⑨ 遺跡ヲ洗ヘル水モ入海ノ石ト思ヘバナツカシキ哉

【伝記】卷上・四十四丁表裏（岩波148頁）

水) ○教へ給シカ一教へ給へシ(興b) 教へ給へ(穗) 教へ給エ(東水) ○喚給ケリ  
 |ホメ給ケルト云々(穗・東水) ホメ給ケリ(慶文) ★「後日」『嘆給ケリ』部分、  
 「或日、華宮殿縁畔リニ経行スルニ」の前に有り(興b)

### 【通釈】

ある日、華宮殿の縁のあたりで経行をしていると、三密の修行や一理の坐禅は、ともに皆仏法の奥義であり、他の人と同じでなくても、志に従って修行したことは人間界の思い出になると思われた。私の偉大な師である釈尊は、染汚・不染汚の二種の無知を断ち、衆生のために理に応じた教えを授けて、泥地のように抜け出しがたい生死の世界から出られるようにしてくださった。このように三徳が満ち足りた功德について、すばらしく理解されたときに、昔幼かったころ暗誦していた俱舍論の偈頌のはじめに如来の智・断・恩の三徳が説かれていたが、昼夜その文を唱えて、その意味を学び、今この大乘のさわめて深くすぐれた法門に入るまで年月を重ねたことが感慨深く思われて、「諸一切種諸冥滅」と読み上げたのであった。ちょうどそのとき、山の斜面に高く懸けて造った花宮殿の下の谷から入相の鐘の音がすぐに聞こえてきたので、次のような歌を詠んだ。

峯から吹きおろす風に「諸一切種」と唱えると、谷のほうから時を知らせる入相の鐘の音がする

後日、人が語って言うところによると、為兼卿がこの歌を賞めて、「これこそ素晴らしい歌だ、歌の手にすべきである。昔の賢人もこのように詠めとお教えになったのだ。今の世の身をよじるように苦悩して詠んだ歌は、皆、詠歌の本意を失っている」とお嘆きになったということである。

【語釈】○華宮殿 ↓④【語釈】。○経行 坐禅の眠気や疲労をさま

すために、一定の場所をめぐり歩くこと。○三密ノ行法 手に印を結ぶ身密、口に真言をとなえる口密、心に仏を観想する意密の三つの修行方法。○一理ノ坐禅 一つの道理である坐禅。「道理」は当然そうあるべき筋道の意。ここでは悟りに至るべき方法としての坐禅のこと。○玄底 奥義。○齊シカラズ 「齊」は「ひとしい」意。○染汚不染汚 「染汚」は心を汚す煩惱のこと。ここでの「不染汚」は「不染汚無知」のことで、煩惱の汚れを離れているが智慧が劣り正しく物事を知ることのできない状態。慧遠著「大乘起信論義疏」に「雜阿毘曇心論」巻第六を引いて「又雜心云、如来断除、二種無知、一者断染汚、二者断不染汚」とあり、『阿毘曇毘婆沙論』巻三十七に「復次若永断二種無知、謂染汚不染汚、是名為仏」とある。○如理 正法 衆生のための道理に應じた仏の教え。『阿毘達磨俱舍論』(以下、『俱舍論』とする) 第一「分別界品第一」に、俱舍論の冒頭部分「拔衆生出生死泥、敬礼如是如理師……」を解説して「能く方便をもつて如理の正教を説きて、生死の泥従り衆生を抜て出しむ」とあるのをふまえたもの。○生死、泥 生まれかわり死にかわりしながら迷いの世界に輪廻して抜け出せないことを泥に喩えた表現。前掲の『俱舍論』冒頭の偈頌における「拔衆生出生死泥」をふまえる。○三徳 仏の悟りに備わる三つの徳。衆生に恵みを与える「恩徳」、煩惱を断ち切る「断徳」、一切を見通す「智徳」の三。○昔シ稚カリシ時… 九歳で神護寺に入った明恵が叔父上覚からはじめに学んだのが俱舍論であった。『行状』下巻・『伝記』下巻(41丁表)には、明恵の臨終間際のこととして、「幼年ノ当初、諸一切種諸冥滅、拔衆生出生死泥、敬礼如是如理師、読シ始ヨリ、志ストコロ偏ニ聖教深旨ヲエテ、名利ヲ繫縛ニ纏レザラムコトヲノミ思キ」(『行状』78頁)とある。

## 『明恵上人伝記』所収和歌注釈（二）

平野多恵

本稿は『明恵上人伝記』所収歌全25首中、⑧～⑩の九首に関する注釈である。  
①～⑦の七首は『明恵上人伝記』所収和歌注釈（一）（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要 第三十七集』二〇〇六）に掲載した。残りの⑦～⑩については次稿を期す。凡例および【語釈】【考察】で示した「↓④【語釈】」等の参照事項は、前稿をご参照いただきたい。

### 〈凡例補足〉

文中の引用資料の所在（頁数など）は以下の通りである。略称を用いた場合は↓の下に示した。

『高山寺明恵上人行状』（明恵上人資料 第二）東京大学出版会 ↓『行状（仮名行状）』『漢文行状』、『明恵上人歌集』（日本古典文学大系『中世和歌集鎌倉篇』所収「明恵上人歌集」岩波書店）↓『歌集』、『阿毘達磨俱舍論』（国訳一切経 論部 第11巻）、『高山寺縁起』（明恵上人資料 第二）、『古今著聞集』（新潮日本古典集成）、『五秘密』（高山寺典籍文書の研究）東京大学出版会。その他、經典の引用は大正新修大藏經に、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠った。

### 〈注釈〉

或日、華宮殿縁畔リニ経行スルニ、三密行法一理、坐禪、共皆

仏法ノ玄底ナリ、人<sup>ト</sup>齊シカラズトモ、志<sup>ト</sup>行<sup>ク</sup>処人界ノ思出ト覺ルニ、我大師釈尊、染<sup>（ゼン）</sup>汚不染汚ニ種<sup>ニ</sup>無知ヲ断ジテ、衆生ノ為<sup>ニ</sup>如理ノ正法ヲ授テ生死ノ泥ヲ出シ給フ。三徳円満ノ功德、有<sup>（イ）</sup>便思<sup>（シ）</sup>知ル、次デニ、昔<sup>（むか）</sup>シ稚<sup>（わか）</sup>カリシ時、誦<sup>（そら）</sup>誦セシ俱舍ノ頌<sup>（しゆ）</sup>始<sup>（は）</sup>、如来ノ智断恩ノ三徳ヲ説ルヲ、昼夜其文ヲ誦シ、其義ヲ学ビテ、今此ノ大乘甚深ノ妙門ニ入マデ年ヲ積ル事哀ニ覚ヘテ、次デニ諸ノ一切種諸冥滅<sup>ト</sup>上タレバ、高クカケツクリタル谷ヨリ入逢ノ鐘ノ声トリアヘズ聞ユレバ

⑧

峯ノ嵐ニ諸ノ一切種ト上タレバ谷ヨリ告ル入逢ノ鐘

後日ニ人語云、為兼卿、此歌ヲ讚テ云、是コソウルワシキ歌ニテアレ。歌ノ手本ニスベシ。先賢モカク読メトコソ教ヘ給シカ。当世ヨリスヂリタル物、皆本意ヲ失ヘリト嘆給ケリ。

『伝記』上・四三丁表～四四丁表（岩波147頁）

【校異】※当該歌なし（慶貞・高慶四・高秀）○畔一辺（興a・興b・物・穂・東永）○人、齊シカラズ一<sup>（イ）</sup>人ミシカラス（興a・穂・東永）人等シカラス（興b・慶文）人ヒトシカラス（物）○染汚不染汚一染行不染行（物・穂・慶文）○如理一如理（慶文）○無知一<sup>（イ）</sup>元智（物）元知（穂）○昔シ稚一昔サ（東永）○如来智一如如来知（興a・興b・穂・東永・慶文）即如来智（物）○昼夜一書夜（興a）○カケツクリタル一カケ造リナル（興a）○聞ユレバ一聞<sup>（イ）</sup>後代ニ為兼卿此歌ヲホムル詞ハカリニ也（興a）○後日ニ一嘆給ケリ一なし（興a・物）○後日一私注云後日（穂・東